

大逆事件が発覚したとき首謀者のひとりとして取調べをうけた幽月管野スガは、その第一回検事聴取書で辣腕の検事武富済にむかってつぎのようにのべている。

私は宮下太吉等と爆裂弾をもって天皇を弑逆しようと謀議したことはありません。いかにお訊ねになりましても今日は何も申しません。貴官には断じて申しません。

私は昨年の夏赤旗事件のとき貴殿の取調べをうけ、また昨年夏『自由思想』の秘密頒布と、同新聞紙上に掲載した「家庭破壊論」の事件も貴殿の起訴をうけ、有罪の判決が確定して、只今はその罰金の換刑処分まで服役中でありますが、警視庁の告発もなく、また京都日出新聞に掲載されたときには不問であった「家庭破壊論」を、幸徳と私が『自由思想』紙上に掲載するとすぐに起訴したばかりでなく、公判における論告は辛辣というか峻酷というか、実に無念の歯をかみならし、悲憤の涙をしぼりました。

管野スガという一個の強裂な個性が、満腔の怨みをこめて権力とむかいあっているありさまを、われわれの目前に思い浮かべさせるに足る聴取書である。このとき彼女は、大石誠之助が『京都日出新聞』に投書した「家庭破壊論」を、『自由思想』に転載紹介したことで武富検事に告発され、罰金四百円の判決をうけていた。しかもその前に赤旗事件でも管野スガは検束され、その罰金や同志の差入れやらでほとんど金銭的余裕がなくなっていたらしい。『自由思想』事件の四百円の罰金をどうしても払えず、換刑処分ということで入獄中のまま、大逆事件のとりしらべをうけることになったのだ。

検事武富済はこの事件において重要な役割を果たす。赤旗事件でも峻酷な雄弁をふるい、のちに大杉栄虐殺犯甘粕大尉の弁護人として登場するこの有能な検事は、わずか三、四人のあいだで話し合われた天皇暗殺計画に、大石誠之助らの紀州グループを結びつけ、更に熊本、大阪へと捜査の手をのびした結果、この四人の死刑宣告という近代史上まれにみる暗黒裁判をつくりあげたのである。管野スガは、しつようにおそいかかってくる権力のシム

ボルとして、この武富検事を認めていたので、取調べにあたっては憎むべきわが仇敵武富検事を殺さずんばやまず」という決意を述べ、一畳の上でお死になることができれば、大変な御幸福です。お母さまがおりだそうですから、おからだを大切になさいまし」とうそぶいたのもむりはない。

しかし彼女がそなえつけの鉄製の灰皿をなげつけるなど、武富検事になっていした反抗態度をとったことは、大石をはじめとする紀州グループにとっては不幸だった。あまりの反抗にやむをえず検察側は武富検事を小原直にかえ、ついに天皇暗殺計画なるものを彼女の口からひきだすのだが、管野スガ担当という重要な任務をとかれて、いわば面目をなくした武富検事が、神崎清も『革命伝説』でいうように一幽月にはずかしめられた名誉挽回のためにも、ひとつ検事のお手本を見せてやろう」と意気こんで和歌山にのりこみ、大石ら紀州の「無政府主義者」六人を追いつめるのである。

大石誠之助はこのとき紀州新宮の町で医院を開業していた。与謝野寛や佐藤春夫の詩にうたわれ、平民社によった社会主義者グループのバトロンとしても知られている大石は、みづからいくつかの文章をかき、『平民新聞』『光』・『直言』・『熊野新聞』などへ投書していたが

その中の「家庭破壊論」という短い文章が管野スガを檢挙させ、また彼自身をも窮地においやったようだ。

そういった因縁をもつ「家庭破壊論」は、管野スガの検事聴取書にのべられているように、はじめ明治四二年五月二三日の『京都日出新聞』へのり、それを要約紹介したものが『自由思想』へ転載された。『明治社会主義資料集』に収められた『自由思想』第二号によれば、それはつぎのような内容である。

まず現在の家族制度から説きおこして、人々が門閥家系をおもんずるのは、財産名譽を血族に伝えようとするもので、ただ富貴權勢の徒に取って利益と価値があるのみだ、という。更に夫婦関係へ言及して、今の夫婦というものは眞の愛情で結ばれたのではなく、自分たちの利益をはかるため経済的に同盟して家という城廓を築き、夫と別れたら食うに困るからとか、妻ににげられたら炊事や洗濯に困るからとかいう理由によって、慢性的夫婦関係を維持しているだけにすぎない、と家族制度および夫婦制度をかんたんに分析して左のような結論を下す。

今の社会を改革する手段として、先づ第一に家庭に手を着け、趣味と理想を一致せずして唯だ経済上の利害を共にするのみの夫婦関係は断然切つてしまわねば

ならぬと思う、我々が今日家庭に就て為すべきことは、決して之を改良することでも弥縫することでもなく、唯だ破壊するの一事あるのみ。

現在の家族制度は「たゞ富貴権勢の徒に取って利益と価値があるのみ」といい、今の社会を改革する手段としてまず家庭に手をつけ「唯だ破壊するの一事あるのみ」と断じているのは、大石誠之助が当時からかなり急進的な社会意識をもっていたかのごとくである。事実彼は武富済に取調べをうけた第二回検事聴取書で、「私は明治三三年頃から社会主義の書物を読みはじめ、同三十七、八年頃から平民新聞を購読して同主義の研究をはじめ、一年ほどして社会主義者になったのであります」と述べている。従って大石は日本における最も早い時期の地方在住の社会主義者だったわけで、しかも幸徳などにしばしば金銭的援助を与えるだけの資産家でありながら、食事に困るもの関知しない家族制度を破壊すべしという論旨をみると啓蒙的要素も多分にもっていたことがうかがえる。そしてその社会改革の第一歩としての家庭改革を、具体的につぎのように示した。

扱て家庭破壊の実行は如何なる方面から手を下すべ

きかと言りに結婚に於ける旧道徳と旧習慣とに反して離婚を以て甚だ自然な正当なものであるとの思想を青年男女の心に植え込み、偶々家庭の不和とか紛じょうとかいう出来事が起った場合には、躊躇せず離婚を決定することを奨励せねばならぬ、次に男女の結合に対する現社会の制裁を無視して従来姦淫だの野合だのとひんせきして来た行為を一般に是認し、私生児を孕むなどと云うことは最も自然なる普通の出来事として見ねばならぬ。

離婚をもって自然なもの、奨励すべきものだという、逆説的な表現をとりながら、いわば大石誠之助は自由恋愛説をとなえているので、私生児をうむことはごくふつうの出来事だという主張も、そういったフリーセックス論から一直線に導かれたものに他ならない。また彼は、「社会の産物」という短い遺稿を残しているが、そこで、生まれてきた人間の子を一総べて社会の産物と見なして社会が之を保護し社会が之を教育する世」を、「社会教育の時代」と名づけ、「社会教育の時代は我々が理想の世である」と書きつけている。この一文は「家庭破壊論」で私生児をうむことを自然だとした主張を發展させ、個人の子供を個人の所有としてではなく、社会全体の所有

するものとみなしたのであり、社会が子供の養育に責任をもつ時代を「理想の世」と考えていたのだ。

前述した大石誠之助の第二回検事聴取書で、「私の主義の理想とするところは、人類同胞平等を基本とし、従って無政府共産ということが究極の理想とするところで」と供述しているのは、そういった大石の思想と良く対応している。彼の「家庭破壊論」は、現在する社会体制を「無政府共産」という理想社会へ改革するための一提案だったといっている。ここで大石誠之助のアナーキストとしての側面を指摘すべきだろう。検事に向って「無政府共産ということが究極の理想」だと明言しているほどであり、「家庭破壊の実行」を奨励するのも、その実現へのステップだったのだから。

しかし彼が思想的にこういったアナーキズムに近い位置へ接近していたとはいえ、それは一人類同胞平等を基本とした「究極の理想」だったのであり、ただちに理想へ向って突進する実行行為者ではなかったようだ。たとえば彼の友人沖野岩三郎が著した小説「宿命」には、大石誠之助をモデルにした主人公トトル田原が、「家庭破壊論」などを唱えながら彼自身は妻子を大切にし将来のためせつせと蓄財に励んでいる、と社会主義者のグループから批難されていたことを伝えている。また「大

逆事件記録第一巻・新編獄中日記」に収められた峰尾節堂の「我懺悔の一節」には、大石のことを「他の社会主義者のように入牢したり、妻子離散すといった風な家庭の好楽・平和を犠牲に供してまでも、主義・主張を牢固に維持する人ではなく云々」と綴っているが、こういった批判も大石誠之助の一面をたしかに伝えていることは否定できないだろう。

だが検事武富済をはじめとする国家権力の側からみれば、大石が「無政府共産」を主張する危険な思想家に映ったのであり、たとえ武富済のまえて「ただし忠君愛国の思想という観念を否認するものではありません。私は虚無党的破壊主義ではありません」とけんめいに抗弁しようとした効果はやはり薄かった。彼が書いた「家庭破壊論」が原因で管野や幸徳らが告発された時、その罰金四百円を立替えてやらなかったというので、大石は他の社会主義者から批判され、大逆事件発覚時にはそういった事情もあって彼は社会主義からやや遠ざかっていたのだが、ひたすら体制の維持を願う極めて政治的なフレームアップのまえには、これらの犠牲者の細いディテールは一切きりすてられ、ひとしく「無政府主義者陰謀事件」の渦へとまきこまれていったのである。

『大石誠之助』の著者絲屋寿雄が、「人道主義を基礎

とした理想主義型の小市民的社会主義者こそ、大石誠之助のすべてではなかったのであらうか」と規定しているのも、大石の人間像としては正しい。しかしそれをふまえてなお大石の思想中に含まれるアナキズムの底流を見逃すことはできない。明治三、四十年代の日本社会主義の特質ともいえるべき、キリスト教、社会主義、人道主義

## 岩佐作太郎の擁護

布 留 川 信

今度、秋山さんと相沢さんがアナキズム運動史を出そうというところで、私と綿引さんに参加を求められたので、参考のために既刊の運動史らしいものを二、三冊見ました。が、どれを見てもアナルコ・サンジカリストを自称するばかりではなく、過去における労働運動はすべてサンジカリストのサンジカリズム運動であったかのような不思議な書き方であることを知ったのであります。そしていつも運動の背後にあり、あるいはその先頭にあったアナキストのことなどは少しも書いてなかったのであります。したがってこれは歴史というよりはサンジカリストの自慢話といった方が適当のような感じがしました。

私はいままで運動史のなものは読みません。また読もうとも思いませんでした。なぜなら、私は多くの友人か

義、共産主義、無政府主義、といった様々な要素を含む思想的混沌の中に彼もまた居たのである。近代日本の初期に入りまじった形で共存したこれらの思想的潮流が、どういった形で分化し発展していったかという問題を解明するためにも、半ばうもれた人々の具体的な言辭を把握し、発定期からの状況を辿る必要があると思われる。

ら、あの本には、こんなウソが書いてあるとか、間違っているとかいうことを始終聞いていたから読んだことがありません。しかし、今度実際に読んでみて、あまりにウソが多いので驚きました。第一、歴史の書き方を知らない。ただ歴史が物理的存在物のごとく客観的に取り扱われ、内面的事実はもとより、未来への流れとしての実践的發展の主体的把握もなく、むしろ運動の衰退から命脈を絶つまでのが書いてあるばかりであります。内面的事実を無視した外面的事実ばかりの歴史は真の歴史は真の歴史とはいえないと思います。これでは決して生きた人間の歴史ではありません。思想のない死せるアナキズム運動史であります。アナルコサンジカリズムの歴史と自称するのも大いに理由のあることだと思いました。

むしろアナキズムの歴史と書かれなくてよかったと思いました。

昭和三年の全国自連の分裂大会にしても、当時、なぜあんなことにムダな努力をしたものだと思いましたが、今にしてみれば、あの大会は日本アナキズム運動にとつて実に重大な意義ある歴史的事件であったのであります。ただ歴史に事実として書かれたものだけをとってみれば、まことに、その通りであります。その事実のよって来るところの背後にある、内面的事実としての思想的背景の流れをヌキにして、ただ外面的事実だけをとりあげるということでは、ほんとうの歴史を正しく伝えるものとはならないのではないかと思います。

岩佐さんの山賊論のことにしても、岩佐さんは、単なる経済運動としての労働運動の本質を山賊の分け前争いにたとえたのですが、悪かったといえれば悪かったのですが、このことが八太さんの『階級闘争説の誤謬』とともに多くのアナキストから労働運動を否認するものとして憤激を買ったのであります。もっとも、これは、私の知るかぎりでは、あとでだんだんハッキリして来ましたが、憤激したのはアナキストではなくてアナルコサンジカリストだったのです。

岩佐さんの言ったことは労働組合運動に対する一面の

真理を語ったもので、そのたとえが、あまりに突飛であったので、多くのアナキストと自称するサンジカリストあるいはアナキストと目されていたサンジカリストがショックを受けたのであります。しかし、それは一つには当時、労働者であるものも、ないものも、だれもかれもが労働運動に心を奪われていたことに対する一つの警告として、わざとあのようなショックな表現をしたものではないかとも想像されます。

岩佐さんは、どこかの会合のとき、この問題について私たちにこういうことを言いました。『オレは労働運動をするなどと言わない、そんな事を言っているんじゃない、労働運動というものは、そのままでは、そんなもの（山賊論）なんだ、だからこそアナキストはアナキズムの精神をもって、アナキストの魂を労働組合の中に注ぎ込まなければいけないというのだ。諸君はどんどん労働運動をやり給え、いや労働運動をやらなきゃだめだよ。』と、私はこのことをハッキリ覚えていました。

それからこういうこともありましたが、こんなことは言わなくてもよいことだと思いますが、この際、言わせて頂きます。私が半歳にわたって、読売で弧立無援の争議をしているとき、ちょいちょい応援に来てくれたのは、近藤さんと山賊論の岩佐さんでした。岩佐さんを非難す

るようなサンジカリストは一人も応援には見えませんでした。あるとき、私が朝日新聞社の前で放送車から街頭演説をしていたら、岩佐さんが整理の人の制止もきかず、わざわざ車の中の私のそばへ来て、演説の終るまで、私によりそうようにして無言の激励を与えてくれました。

あのときのことは、ほんとうにうれしくて忘れられません。このことによっても岩佐さんが組合運動をするなどいって否定したものでないことは事実をもってハッキリ証明しています。また一方、今日の労働組合運動はどうかといえますと、残余ながら、ますます『与えてとれ』の商品的行為となって山賊の分け前争いを演じています。このような現状をみて、われわれは、いよいよアナキストの組合活動の重要性を痛感いたします。

当時の情勢としては止むを得なかったことかもしれませんが、四十五年もたった今もお、岩佐さんが労働運動を否認したなんてことが、まことしやかに伝えられているのは、人間の進歩が、いかに困難なものであるかを知らされるものです。革命は前途遠慮どころの話ではありません。私もいままで岩佐さんに対する非難のあることは、とるに足らぬ問題として聞いてはおりましたが、岩佐さんの死後、これほどまでに定説化されて、歴史の上に残されているとは思いませんでした。もし、これを

後の世の人が読んだら昔のアナキストはずいぶん幼稚なものだったと思うでしょう。

少し冷静に考えれば、岩佐さんが労働運動をするなどいって、そんなことを言ったのではないことは、わかりきったことであります。岩佐さんの残した文献にもそんなものは絶対にあります。われわれ労働者は労働組合を作ったり、労働組合員となったりしてアナキストとしての活動と宣伝の場所を求めなければ、それこそどこに活動の分野があるでありましょう。むしろ、これは労働運動をするわれわれの心構えとして話されたものと受け取るのがほんとうではないでしょうか。このような心構えとしての知識を身につけてこそ、アナキストは確信をもって勇氣ある労働運動ができるのであります。それを憤激したり驚いたりするのは、そういう心構えが、まだできていなかったからではないでしょうか。ここが、問題なのです。岩佐さんは労働運動をするなどいって、むしろ心構えを作って労働運動をせよといっているのです。

でありました。しかし、信ずる信じないは、その人の自由で、岩佐さんの知ったことではありません。まして、それが曲解された場合は、なおさらであります。ことに運動の衰微までが岩佐さんの責任であるかのようなことを言って、自分のことを忘れ、なにも関係のない一般人のような立場からの言い方は、自らの奴隷的立場を自ら暴露するばかりではなく、あまりに自主性のないことではないでしょうか。もちろん衰微したのはアナキストであってサンジカリストではないといいたいのでしょうが、それは、いまとなつては、時の前後こそあれ、目くそ鼻くそを笑うものです。このような自己喪失的態度は断じてわれわれ自由連合主義者のとるべき態度ではありません。

とにかく、岩佐の言うことが、そんなに信用ができませんでした。無視して問題にしなければよかったです。それでもできないで岩佐を非難するのは、奴隷根性で岩佐を大物視するのあまり、心理的には岩佐に支配されているからではないでしょうか。たとえ岩佐がなんと言おうが、おれはおれだというくらいの気概がほしいものです。

われわれは、やせても枯れても、それぞれ自由連合主義者として責任ある特定の指導者を拒否する自由独立の個人であると同時に、かつては一般組合員に対して指導

的立場をもって自認するものではなかったでしょうか。

岩佐さんが、たとえ、どんな間違ったことを言ったとしても、それを判断して取捨選択するのは自分自身の自由と責任においてです。岩佐さんは、ただ自分の考えを述べただけです。それを岩佐があんなことを言ったから、それからわれわれの運動が、こんなことになったというのではあまりになさけないではありませんか。運動衰退の原因が、岩佐の労働運動否認にあったとしたら、その責任は一体だれに負わせるのでしょうか。自分と言ったことと自分のやったことの責任は、他人の責任にはできないはずですよ。

岩佐さんの山賊論を自ら曲解しておきながら、それを承認することができないといつて、勝手なことをいっている人たちは、本来ならば、それに抗議するために一ようし、それでは、われわれは今後一層労働運動に努力するぞ、と決意を新たにすることを示すべきはずなのに、あに図らんや、岩佐が労働運動否定論を言ったから、それ以来われわれの運動が衰退したというがごときは、とりもおおさず、自らの運動を岩佐の言うがままに許したということに、ほかならないではないか。これでは岩佐の説に反対しながら、結果的には事実の上

において、忠実に岩佐の説を肯定してしまつたといふことになりはしないだろうか。多くのサンジカリストが始めから終りまで、このような一人芝居を演じておきながら労働運動の衰退が、労働運動に直接関係のない岩佐さん個人の責任であるかのような書き方はアナキストのためにも、サンジカリストのためにも止めてもらいたいと希望いたします。

いうまでもなく、アナキストは、どんな理論も経験もすべて過去のものとして未来の参考とすべきものと考えております。しかるに岩佐さんに対するサンジカリストの態度は、あたかも理論は行動を拘束するもの、行動は理論に支配されなければならないものであるかのように考えられているようであります。もし、そうでないとしたら、そんな言いがかりみたいなのは言われたいはずであります。行動が主であり、理論が従であることは、たれよりもサンジカリスト自身が最もよくご存じのはずであります。

しかるに自由なるべき岩佐の理論にいわれなき集中攻撃を加えるのは、自らの理論の貧しさを暴露するともに、相手の理論に心を奪われて、自らの行動の自由を失う結果を招く以外何物もないではないか。もしアナルコサンジカリストを自称する人たちが、ほんとうに人間的

立場に立った自由連合主義者として自主的精神を持ち合せていれば岩佐の理論などは、どう考えても、とるに足らぬ問題であつたはずであります。こんな問題をとりあげる方がよほどどうかしていると思われまふ。相互に理論を尊重し合つて、理論には理論をもつてするのが自由連合主義であり、そこに進歩も発展もあるといふものです。相手を傷つけなければ自分が傷つきません。それは自由連合主義の逆行です。そこには衰退あるのみです。相互に人格の自由を尊重し合う自由連合主義こそ人間生活の基本的原理であります。この人間の生活原理に対して無理なイデオロギー呼ばわりをするから「自由なきアナキズム、思想なきサンジカリズム即ちアナルコ・サンジカリズム」と極論するものさえあるのであります。

最後に一言しますが、もし運動衰退の原因が岩佐の山賊論にありとすれば、それは、それを曲解したまま組合員に宣伝した自分自身にこそ、その責任の重大性があつたのではないだろうか。それでも、なおそれはアナキストの組合のことであり、サンジカリストの組合ではないと断言できるか。自由連合主義は善悪ともに連帯責任であります。自由連合組織の柱ともいふべき指導的立場にあるものと自認するものとしてお互いに反省すべき問題ではないだろうか。多言多謝

## 戦後の思い出 一

### 1. 終戦・炭坑へ

一九四五年十一月、戦争生残りの自分は、焼けたゞれた東京へ舞い戻つたものゝ、住む家も失ない、戦前住んでいた焼跡の防空壕を寝ぐらとし、二ヶ月余りブラブラしていた。その間、家族の行方を求めて、八方手をつくしたが遂に消息をつかめず、一応見切りをつけ、あとは氣長に朗報を待つ氣になつた。たまたま、今後、自己の生甲斐として、末端労働者の実態を見きわめるため、炭坑行を決心していたので、思い切つて住み慣れた東京を後にした。

途中、名古屋に下車。こゝも焼野原であつたが、駅や主要な部分は、アメリカさんが残しておいた。幸いにして、母の家は焼け残り、母も無事であつた。母、じゃう七十四才、私、二郎四〇才。

母は私の顔を見るなり、仏壇に灯明をつけ念仏を始めた。私も母の氣持を汲み本心ならずも母の後に座つた。母の最初の言葉は「よう生きてりゃーたなァー。だつた。この言葉が持つ意味は、私にとって感慨無量だ。名古屋滞在五日、その間に聞かされた話の中に、私の

杉 藤 二 郎

消息が不明だといつて、警察が母を責めること再々、豚箱へ泊められたこともあつたという。私が戦地へ行った事がわかる迄は、母はずいぶんと、私の思想の為に苦しめられたそりだ。その母が「おみゃさん達が言う自由な世の中になつた。何でも好きなことをやったらえゝ。」と結び、私の炭坑行を理解した。

最初、母が「これからどおしやあす？」というから、炭坑行きの決心を打明けると、さすがに驚いて、「いくら何でも、前科者しか行かん炭坑へ行かんでもよからうが……。」となげいた。当時、一般の認識は、炭坑といへば、この世の地獄絵図であつたらう。母は度々私を引止めようと試みたが、私はこれから自分が進もうとする労働運動について、くりかえし説明し、納得してもらつた。戦前の母は、私の思想を訳もわからず、きらつていたが親の情愛は常に変らなかつた。官界や教育畑に居る姉や兄に会つたらと、母はずゝめてくれたが、私は、彼等が相変らず私を異端者扱いするだろうと思ひ、会ひのを止めた。そのとき弟はまだ帰還せず、支那の奥地で生死のほど不明であつた。

いよいよ、九州へ出発の日、「そのうち、子供達も生きとりゃこゝへ連絡するだろう。警察ももうわしを豚箱へ放り込むこともにやいだろうでよう。人の為になる事だつたら、何でもやるさ。からだだけは気をつけてなあ」と言いながら、貴重な薬用アルコールを一本くれた。母の言葉は、私にとって何よりの饒別であった。

## 2. 人力車と炭車

私が博多へ着いたのは十一月末日だ。博多駅から住吉神社の先にある、麻生鋳業の案内所まで、人力車で乗りつけたので、係員が驚いていた。案内所と言ひ看板は掲げていても、昔風の桂庵（口入屋）で、爆撃をまぬがれた普通の家に、机一ヶと椅子二、三脚を置き、壁に坑口名（コウクチメイ）と地図が張ってある。そこで型通りの紹介状をもらって、教えられた汽車に乗り、上山田線白井駅に着く。秋の陽は沈むに早く、白井駅に着いた時は真暗で、ただ一つ出札口のハダカ電球が、遠くまで光を放っていた。くらやみの中で声を掛けられた男について吉隈坑の飯場へ着く。こゝは百ワットもあるうか電球がまばゆい。後で知ったが、私をこゝまで案内した男は、稲見耕男という大納屋（オオナヤ）育ちの若者で、本職は坑口捲方（コウクチマキカタ）二十四才。彼は親も縁

者もない孤独だ。後日、私は彼の仲人をするようになるが、私を炭坑に落付かせたのも、私を組合長に担ぎあげたのも彼である。私もまた彼を知的にリードした。（現在の彼は全鋳連の重鎮である。）

第一步を印した飯場（まもなく食堂と呼ぶようになる）で出された食事にまた、印象が残る。軍隊式のアルマイとの丼に、米と大豆（七分、三分）の山盛り、同じくアルマイトの皿に、切干大根の煮付けと漬物（大根漬五センチ位のぶつ切一ヶ）私は米のところを一口して箸を置く。味は良かったが、量的にうんざり。二口目の箸を取ろうとしていたとき、近くのストープを取掛いていた連中の中から、「そのメシ、残ったら下さい。」という男があった。私は箸をつけるのをやめて、その男に食糧を全部やった。稲見の話によると、この男は山崎と言って、ドマグレ（仕事をせずなまけること。註参照）ばかりしていて、食堂へ来ては、人の残飯をあさるといふ。当時は、炭坑でも働かない者には規定の配給だけで、アメリカからの援助によるベiconや砂糖が米に換算されて、やつと二、四〇〇カロリーを保つ状態であった。野草は勿論、さつま芋の莖まで食糧にした時代だ。炭坑夫になる人の大部分は、住居も職も失くした都市生活者か生き残りの復員者だった。しかし私は餓えてはいなかった。軍から

持って帰った缶詰も幾つか残って居たし、母から貰って来た食糧、アルコール、衣類、何一つ不自由してはいなかった。

註 ドマグレは常に脱線、休んだりすること。ノソンは逃げ出すこと。

私の部屋は稲見と同居に決められた。稲見は所謂ボスで、私が来る迄は、六畳一間を独占していた。私が入山（炭坑夫として鋳業所へ入ることを言う）した当時は、まだ住宅も整理つかず、捕虜収容所の跡や、朝鮮人が住んで居た納屋の改装最中であつた。私の居室も、一棟八戸の棟割り長屋を独身寮に改装した一室にすぎない。この寮は、四畳半には三人六畳は四五人と決められていたが、稲見は口さがない坑員達を尻目に、六畳を独占していた。しかし、稲見といえども労務係に何時までも逆らう事の不利を知っていたようで、私をどのように評価したのか、自分の部屋へ同居さすことで、労務と妥協したらしい。

それから四十日程、稲見は捲方、私は坑内夫として同室に暮したが、その間に私は稲見から、炭坑独特の言葉や風習を教えられた。私もまた、稲見に総ゆる知識を注入した。また稲見は、この間に戦前よりの炭坑マンの多くに私を引き合わせた。アルコールを四・五倍にうすめ

て飲むことも知った。メチルアルコールを飲んだこともある。この当時、アルコールを飲んで、処々の坑口で死者が出たが、稼働方数に依じて与えられる酒の特配は少なく、相変らず、メチルアルコールが流行した。診療所の医師達ですら、ガソリンを蒸溜して飲んでいた。私が持っていた日本薬局法の純粋なアルコールが、如何に貴重なものであつたかは、現代の人々にも察しがつこうと言ふものだ。

私が労務係になつたのは、四十六年（昭和二十一年）正月上旬だが、それには、こんないきさつがある。若い坑内職員がノルマをあげる為、坑員に暴言を吐き、今にもなぐりつけんばかりに叱咤する。聞きかねた私は、その職員に向つて語気荒く反論した。理屈に負けな若い職員は、多くの坑員にはやし立てられ赤面して、「お前達を使いきらん。覚えておれ。」と捨セリフを残して、坑内から出ていってしまった。当時私達は東京隊と名付けられた三人の先山（注1）の下に三十人程の新山（注2）で一つの切羽（注3）に働いていた。先週末、炭車（ハコ）といって、掘った石炭を入れるトロッコ）の配車が悪く、時間外労働を三時間多くさせられた代償として、この日は早目に作業を止める約束ができていた。にも拘らず、その係員（職員は先週の約束事など知らぬ顔の半兵

衛を決めこみ、一画でも多く出炭し、会社に忠実たらんと、労働者を叱咤したのである。こんな酷使は、炭坑では日常茶飯事で、係員にさからうことが、どんな禍をまねくは、古い坑員は、身にしみて知っているのので、誰も口答はしなかった。私は、そんな古いしきたりは改むべきであり、労働者の解放は労働者自身が闘い取るべきだという理念を持っていたので、この時それが爆発し、係員に立向ったのである。私は大声で、「係員が上ったか

## テルアビブ空港事件

三名の日本の青年ゲリラは世界的な波紋を呼んだ。二人は自決し、一人は捕えられた。大使は涙を流し、日本政府は特使を派遣した。イスラエル首相は、どの国にも逸脱者はあると言ひ、PFLPは、俺達がやったんだと豪語した。そして世界は日本人そのものの精神構造が分らないと問題にしている。

生き残った岡本は、イスラエルには何の恨みもないばかりか、好感すら持っていると言ひ、革命のためには止むを得ずテロを強行したと言ひのた。赤軍派でもそうだが、こうしたテロの濺発によって人心を不安にさせて、それに乗じて革命を、といった十九世紀的なロシアのニ

ら、我々では切羽の状態がわからん、落ばんでも起きたら大変だ。生命あつての物だねだから、我々も上ろう」と、全員に呼びかけ、職場を放棄し、坑外に出てしまった。当然問題となった。

註1. 先山(サキヤマ)とは、経験を重ねた古強者(ふるつわもの)で、探鉱係の信任も厚く、可成りの統率力もあり、卒先して仕事をする。

註2. 新山(シンザン)新しく入山した者。

註3. 切羽(キリハ)探掘する場所の石炭の壁。

## 三浦精一

ヒリストの考え方をしているのではないかと思われる。若い生命の燃焼するままに花と散る姿は日本の美と考えられて来た。武士道とは死ぬることとおぼえたり、あるいは大義親を滅す、と教えられて来た。今の青年たちは、こんな言葉は知らないにしても、日本の社会構造は徳川封建制以来の階層構造、階級意識に深く染められたままである。土農工商の身分階級の序列が変化して商人優位の金の世の中になった。官庁も会社もピラミッド型の組織で下層者の忠節が秩序の維持に不可欠だというのが常識である。上位の者は、権力的支配者で金力を持つかあるいは金力と妥結している。大学を出るのも出世街

道を上位に進む競争を有利にするためである。

こうした中で成長して、たまたま社会不正に返逆するにしても、大部分の者は権力的階層構造でない社会を考えることができないうい。マルクス・レーニン主義、毛沢東主義、カストロ主義その他、すべて権力思想で、官僚支配の実現を目ざす以外のものではなく、多くの者がこうした権力国家になることを革命だと考え、迷うことすら無く行動している。迷蒙だ。革命は社会的に変革されるのが真の革命でなければならぬ。

テルアビブの三青年にしても、権力主義暴力革命の尖兵として、一身を挺し、生命を羽毛の軽きに比して、大義に殉じようとした気持態度は立派に見える。だがここに顔を出しているのは、古い日本の思考と行動である。この日本のなものがマルクスの革命思想に合流し、アラ

## 野火

肉弾、高尾平兵衛

萩原晋太郎君の苦心の著「高尾平兵衛」が、今最後の校正を終って印刷中だ。本誌が出る頃にはすでに世に出ているだろう。

高尾は火の玉のようにアナキズムを戦った。高尾ばかりでなく、この頃のアナキストのほとんどすべては

ブ的沙漠的、遊牧民的な、武断、虐殺的な行動と共鳴したものと見るべきであろう。この三者を通して流れているものは権力的武断思想である。命令に服従して、個を滅し、多数を殺傷して、一体何が革命だろうか。葉隠れ精神とは言えるだろう。鈴木大拙がこの葉隠の中に禅機を見たのは、いかにも日本的で、低級な禅だ。

われわれは個が他と共に自由に生を実現できる社会を望むからこそ革命を考えるのだ。奴隷根性が存在する限り自由は無い。奴隷が権力を夢見るのは弁証法的だ。われわれが奴隷主義的マルクス主義を排するのは、自思の平等を求めるからである。駱駝が針の穴を通れないように、富者は天国に入れないとキリストは言ったが、革命後の社会に権力者の座があつてはならない。

その青春をかけて火と燃えていた。理論を追及し、アナキズムの理念に動かぬ基礎を与えようとした大杉に反撥せずには居られなかったのは、内に湧き立つ血が行動にかり立てるからだだった。「間違つてこそ人間」とシェクスピアも言ったように、インテリも労働者も間違う。

アナーキストの歩く道は踏みかためられた道ではない。茨を分け、岩につまずきながら切り開いて行く道だ。血を流しつつ行く道だ。権力なき正義の社会への瞬間ごとの革命の道だ。

一九二三年六月二十六日、赤化防止団に押しかけて、米村の凶弾にたおれた高尾を、「このまま見すてて逃げたは男がすたる」と吉田一と平岩巖とは、抱き上げて近くの家に運び、寝かせて医者呼んだが、後頭部をやられた高尾はすでに絶命していた。「男がすたる」という古い日本の構造の中の言葉。庶民はこうした古い言葉で新しい時代を築く同志愛を表現し行動した。

七月八日、日本最初の社会葬だった。アナもボルもこぞって参加して二千人を超えた。大阪でも天王寺公園で同時刻に行われた。

上海から朝鮮を経て日本に帰る途中の旅館で病苦の女を救い、郷里の対馬に帰る船にのせたが、女は船中で死んだ。野辺の送りを済ませて使命に立上る高尾の中には姉が語る「この子に銭持たすと、難儀の子にくれてやる」幼児の魂が、最後まで消えることはなかった。社会葬に列したこの姉は、「葬儀は兵隊さんが多勢ならんで国葬のようにやったと話したら、あれは兵隊じゃなか、警戒のオマワリだといって笑われた」と語った。この姉に抱

かれて遺骨は郷里諫早に帰った。アナキストには「大義親を滅す」などといった権力主義者の用語はない。

ロシア革命当時、多くのアナーキストがナルコ・ポリシェヴィズム的思想に迷わされた。高尾もその一人だった。純情な高尾がふたたび大杉と手を握る日が来る前に彼は散った。それから二ヶ月余、大杉もまた凶刃にたおれた。

この本は日本のアナーキズム運動の側面史である。どうか広く読まれることを祈らずには居られない。(三浦)

X

島 哲平君から

「飯塚黒色戦線」でまいたガリ版刷りのピラ「すべて市民に訴う、アナーキズム(無政府主義)の誤解をとく」を送って来た。無政府主義といわゆる無政府状態について説明し、政府の仕事や権力をゼロにしてしま、住民の、住民による、住民の生活を目指すのが無政府主義である」と結んでいる。(三浦)

☆

『永久革命への騎士・高尾平兵衛』評

資料の収集に大変に御苦労された事を推察、確かに大労作です。近年、運動史ブームの中に取残されている「高尾平兵衛」の足跡を追って、その背景、大正時代の社

会運動の展開してゆく実体を究明した書として、示唆書き問題提起の快著です。(河本乾次)

御多忙の中をよくあれだけ調べられたものだと感心すると共に、心より敬意を表します。若い私共がもつとしっかりせねばと思っております。(磯谷武郎)

こんなに早く本にされるとは思いませんでした。生地まで踏査されて沢山の資料をもちこまれているので、研究者にも参考になる事と思います。(森長英三郎)

実物を見て一種の驚きのようなものを感じた程でした。高尾のような異端というか、主流に位置しなかった人物は仲々取上げられないし、取上げられても資料的に十分という事になりかねませんが、それに敢て挑戦され、立派な一書を世に出された事に敬意を表したく存じます。これから大いに参考にさせて頂きます。(小松隆二)

こうして貰っておけば浮ばれる。自分で書いたり出したりする者はいいが、でないと段々薄れて行ってしまう。(望月 桂)

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月1回15日発行

昭和47年6月15日発行 Vo. III No. 7

編集兼発行者 三浦 精一

発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦精一)